



門 18 特
號 1833
卷 42

繪本を圖記四篇卷之六

目録

- 明智左馬入に長共湯與美令話
- 光秀の妻室令して家人等を去しむる圖
- 光秀の家人坂本を去り離教の圖
- 明智左馬入に長共湯と美令と令圖
- 明智左馬入獵して白狐を得る圖
- 入江小七郎足利の家より石をうつる圖
- 入江小七郎足利の家より石をうつる圖
- 入江小七郎足利の家より石をうつる圖

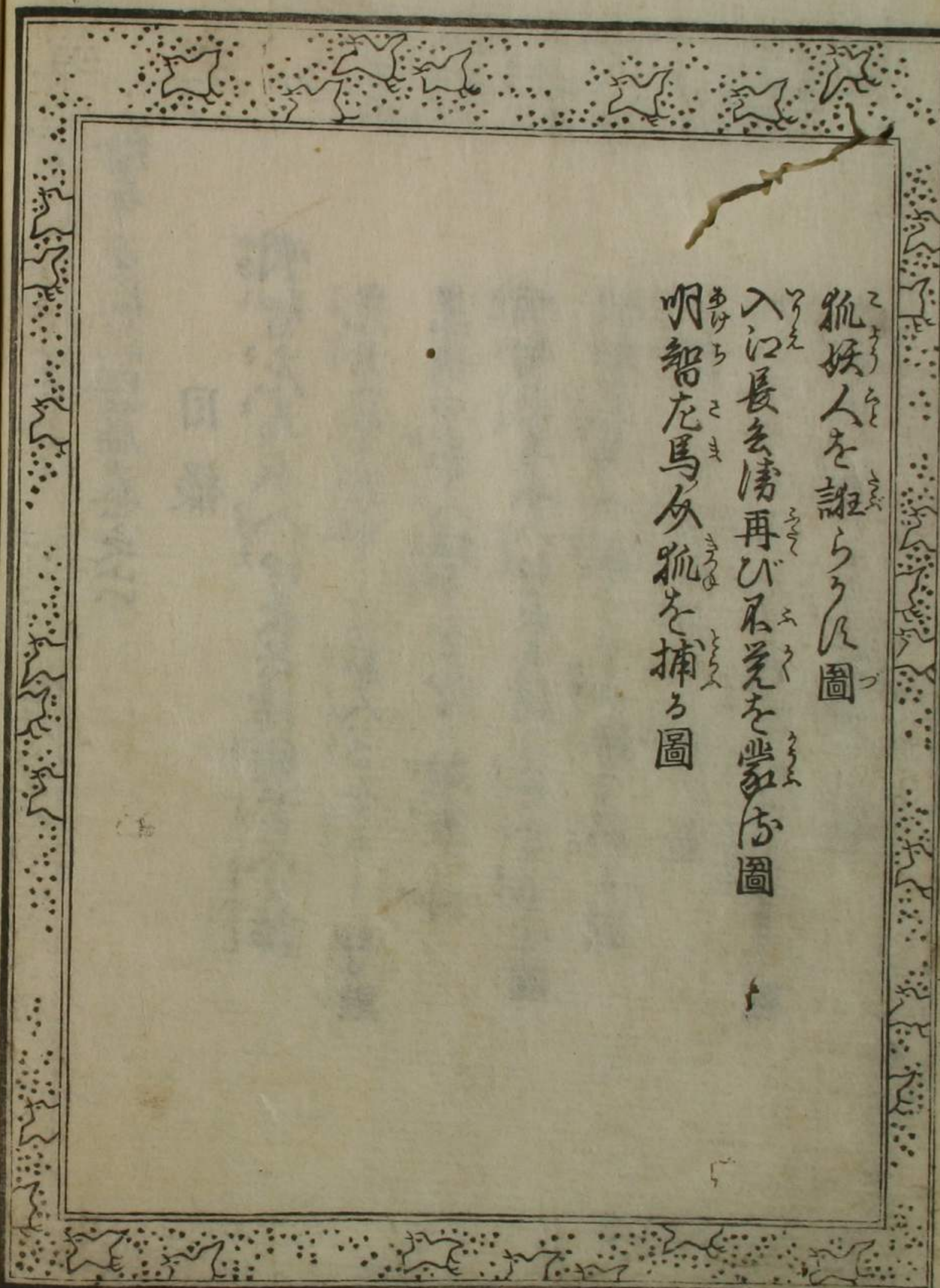


真景日記

狐妖人を誑らう図

入江長左衛門再び石見を誑らう図

明智左馬次狐を捕らう図



繪本左圖記に篇卷之六

明智左馬次入江長兵衛と共合

左馬次光吉は天敵を凌ぎ坂本の城に入れば明智十次兵衛光康入る
 長岡越左馬次を待交先利是預共びるる山崎の級軍光秀が討死
 を物語りまは後よむせびるけ長岡越の明智十郎左衛門が又よむ
 光秀が叔父より叔父の計を汲むべきと譯後一ころ光秀の妻室を
 妻本を計取能く姉也る奥より立出中々の出家の附運は俸又か
 果ぬる上の急角の譯定よ及まほしく即後の面くを何方もあらず
 城又火を掛け舟をばし自親も自害のしむと蓋て思ひ汲けいする
 き長治後又附越を後一秋一考られ後とせん糸練の足踏はおまへ
 具の人の寄る所向もあはれいよくけ育よあしられ物に一と中





言 显言四七何之卷二

此の如くは、いふに、を、取、り、善、く、玉、格、の、改、め、を、い、は、し、め、い、女、將、の、不、敵、と、す、
 於、令、ま、と、取、る、も、滋、に、難、み、き、次、守、い、い、と、感、涙、を、流、さ、る、相、談、中、に、龍、宮、
 勇、士、を、以、り、三、宅、周、防、を、業、新、村、誠、三、十、郎、兼、則、口、三、五、ま、貞、教、
 村、上、右、衛、門、清、武、和泉守、今、峯、新、郎、兼、政、中
 川、源、右、衛、門、清、政、内、三、次、郎、忠、長、尾、石、左、衛、門、武、清、和泉守、子、新、村、河、内、右、衛、門、
 兼、後、守、右、衛、門、長、盛、中、次、郎、右、衛、門、知、系、後、守、子、久、下、三、九、衛、門、勝、元、等、
 以、下、廿、六、人、の、勇、士、列、陣、し、て、討、死、自、言、を、と、も、い、せ、ん、と、ぞ、勇、々、と、此、内、に、山、
 崎、の、合、戦、を、遣、り、先、秀、が、討、死、を、知、り、以、て、け、坂、本、へ、来、り、者、後、中、
 村、誠、三、十、郎、は、十、三、日、の、夜、勝、龍、寺、より、先、秀、が、後、陣、に、は、り、坂、本、へ、
 馳、り、よ、る、ふ、一、揆、を、う、え、ん、く、て、味、方、の、勢、ら、り、く、と、ゆ、り、村、誠、三、
 十、郎、の、村、士、等、も、又、圍、を、と、ん、ど、く、と、合、戦、し、先、秀、が、切、腹、と、も、知、り、

後、の、明、方、は、坂、本、へ、是、り、つ、ら、る、に、此、城、を、拵、じ、て、候、く、討、死、せ、ん、と、
 終、く、殺、す、に、面、は、取、其、下、知、系、將、居、る、時、は、長、岡、孫、諸、士、は、向、ひ、て
 中、つ、ら、い、相、も、一、所、の、面、に、出、家、の、事、度、を、見、仰、ら、る、ま、さ、り、附、
 此、の、面、に、出、家、の、事、度、を、見、仰、ら、る、ま、さ、り、附、
 急、ぎ、此、を、退、き、退、き、る、者、の、御、子、孫、を、見、候、事、也、世、御、善、候、を、見、仰、ら、る、
 中、つ、ら、い、ゆ、り、二、世、ま、で、の、忠、義、我、ら、る、ま、さ、り、此、有、水、の、方、より、も、是、り、候、事、
 是、の、子、に、く、退、系、の、事、候、に、と、り、此、は、皆、一、日、は、面、を、後、へ、い、候、事、
 是、へ、不、中、い、る、を、取、り、以、着、る、我、く、ま、く、の、傍、守、を、離、さ、り、中、に、我、を、
 り、い、行、陣、と、も、御、一、不、中、と、覺、悟、し、此、に、急、ぎ、退、き、候、事、也、
 是、の、い、誠、は、未、練、の、者、と、思、ふ、候、に、其、面、目、を、見、候、事、也、
 是、れ、は、切、腹、と、し、我、く、心、を、御、後、に、入、り、と、皆、く、服、指、の、柄、を、

光り
あが
け
家
人
を
板
本
を
出
し
て
の
離
教
の
國



真
顯
記
四
冊
卷
六



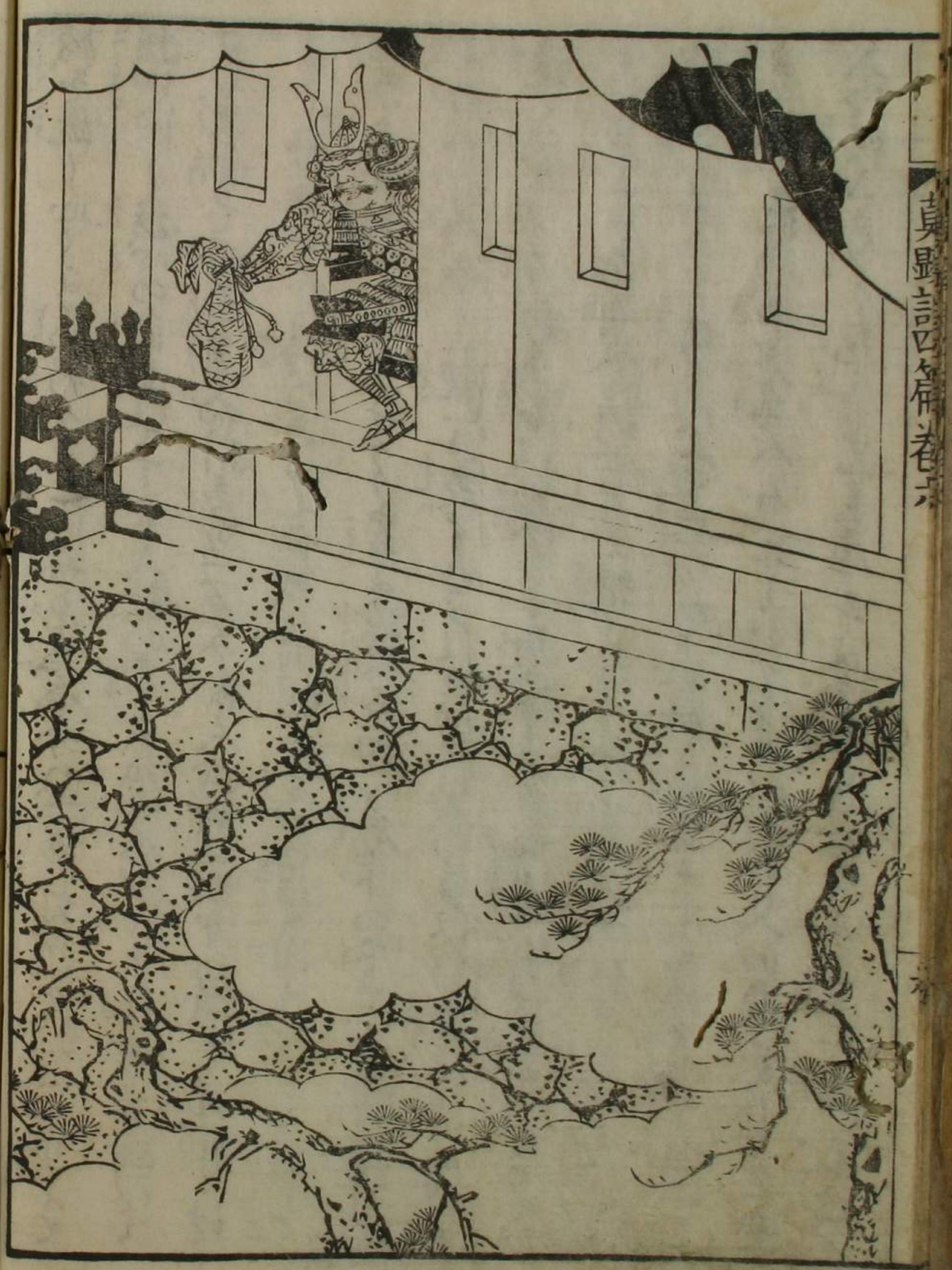
真
顯
記
四
冊
卷
六

野見長雨敵在馬成山の方諸も周妻押ふを馬成手にするも
是の事拙小狂ひの穴今此城は楯籠り始終るる也しるも是の穴は此の
我も山の方へ進を興しなり先丹及忍びりてねふも味膳と也
らしを君の沖志を継ぎ再び惟任氏の家名お継とまき志うてい今一所
は退去つるべきも余り物障り人の目もまはるべくも出城と
ま退きいて面く其身を堅固し君の沖家名お継專一と心よりけい
まんけいとの忠義おほしくいけいともほくせらまは物なりが山の方へ進
まははしまは二世との勲もさるべくいと味を合んごやろふけいせい
ま及び後より後ひやんさ育令取しこれいあまお大まはたむけの妻
あざろるをこれとくくと勲しこれい光秀の妻室金銀をへる代衣一つ
つ賜り其外の将率百奈人皆米給金銀を分らむらるるは皆

原を流し心くは流りる長雨敵在馬成今心易し敵兵を引退一軍して
後切返と後心の郎等七十余人敵のある所今やくと待居る時にそ
目も又言て城は角の計まが二万五千人は敵は坂本の城を五圍しけ
ま一と敵軍せんもゆるまが合戦い明朝と定ち皆堅固は陣とま無を
獲て夜の明るを見合せたりまは城体を即ち麾下の士は入は長兵衛と
ま若もた馬成とい観しきまはあまこれい何れ人のまはけまんより彼ま
途て政をや交我も名に傳へんと夜の中より城下に付て明るとほし
と待居りた馬成い何心なく櫓より板間の板を細く抜き寄りの
陣を詠居るるが城下の人の悲ひ居るも敵も味方々と同然定めて隠し見
ま入は長兵衛之を馬成をうけてそこに居い入は成りていまは成りや
入は成りんもたまは光秀及ていも茶田城の二邊を志し茶田



あけら
明智
龍馬
久
入江長三郎
あさ
とある
園



真言宗四卷

乞ひてはひの朋友の交を盡して不思後より河をうほひのふたふた馬
 女乞を學て中やうの我今我炮をひて妻後を討んた人聖めて飛
 去も生んや叶べうに我とてふも我之下と朋じてゆくは流又廿
 年若頗柔弱の士とて此に今け城の一番系を心け只一跨堀に付て
 合我を約れい勇志と感て殺て妻後を殺て今け城陥り我死せん
 り今日を限とて末期の二言をひて妻後と遺さん何にと言とて此に
 終ひそ我少りし時より我場と終ひ毎に野殿の功を心に武名孤揚
 んと勵じも早妻身を飛して子孫の後業を思ふのそ之術も天會
 編り運る時今日我之守若くなく危死を候根若を嘗終よ
 り身を落るの地とて妻後も又かくのやうに候は仕を止免
 りを安き心並て危と隔るゆゑうらむし今妻後と若令を交へん乞と

以て恒の壽とせしれ以て若令三百枚草袋入て投出れ入此河と
 ばて候を流し若令を推戴き足下の石上今にせしに漢で只今
 の教訓ははひ妻居の地を需むに」とそまひに名錢を惜とて入に
 味方の陣入りはうり若令若令三百枚とふい今の三両分も是に
 入に長兵清此軍軍と後仕を死て系師は恒町今や貨殖を
 宗に愛おしめて老後の觀樂を極めうそ武まの平まにいらむと
 是も身を刺しいまう人き平け入に長兵清とふい向道に依り本
 兼復の家人に「若令永福のにせし馬女いま三宅孫平治と時
 浪にせしは後入に候とて妻も若令が孫生の末は是のどや
 うかろい候吹らに将せん人鉄炮おさげ安被不獵あるけど
 今やいふるもやにや急の兎一つふ得たれが真を失い本意は」



明^{あきら}智^ち 龍^{りゆう}馬^ま女^{にょ} 將^{しやう} 龍^{りゆう} 白^{はく} 龍^{りゆう} 得^{とく} 龍^{りゆう} 國^{くに}

真經詩四篇卷六

て体段しつは、傍なる林の中より、狐三疋といひ出、一疋はけ方、
 馳入り、兩人をとりて、遁とま、と森の内を捜せり、何れ(や)迎と
 まらん、又、其、込は、れ、山、深、く、求、つ、つ、ふ、と、つ、つ、洞、の中、は、白、き、狐、の、居、
 居、り、た、馬、女、甚、怒、び、只、一、お、と、換、炮、の、筒、派、と、向、り、ふ、不、思、後、や、け、狐、
 派、を、流、し、人、の、お、と、を、出、我、今、春、の、春、付、く、既、に、ふ、生、ん、と、な、
 ら、け、に、助、け、給、れ、と、も、派、合、せ、と、辞、つ、つ、長、兵、衛、を、受、て、表、と、借、し、
 た、馬、女、が、筒、先、よ、ま、寒、り、け、換、炮、の、筒、派、と、し、も、年、経、白、狐、の、通、力、
 も、多、く、迎、去、り、も、叶、さ、り、と、刀、を、う、り、派、は、不、便、の、お、換、り、れ、派、と、き、り、
 て、外、の、路、を、持、せ、ん、と、つ、た、馬、女、は、之、に、笑、ひ、只、下、り、に、勇、音、派、と、生、
 得、た、物、は、感、ず、て、た、換、の、事、と、中、に、お、ろ、ろ、ふ、い、ふ、生、く、守、狐、女、人、
 助、ん、と、の、ゆ、か、れ、い、不、合、持、は、物、ぬ、を、う、ろ、ろ、ん、今、朝、う、け、派、と、持、

りし、急、一、疋、を、得、ぬ、一、方、ち、ら、ぬ、白、狐、を、見、付、お、け、り、て、止、へ、き、れ、長、
 兵、衛、を、突、の、け、く、福、以、望、也、換、炮、の、引、合、と、障、と、刀、は、只、一、炮、り、
 件、の、白、狐、を、お、殺、せ、り、た、馬、女、は、小、話、ひ、今、日、の、得、物、を、換、辭、り、れ、余、
 の、歎、い、え、得、ざ、れ、も、白、狐、を、れ、は、一、疋、と、て、事、は、只、一、日、も、西、は、傾、き、こ、
 い、ご、家、に、ゆ、り、と、被、狐、を、換、炮、と、換、り、付、り、お、げ、て、と、ゆ、る、る、
 と、ぐ、も、長、兵、衛、は、何、と、る、心、よ、ろ、ろ、を、急、思、ひ、南、思、ひ、替、り、と、して、銘、
 家、に、ゆ、り、つ、る、長、兵、衛、は、子、小、七、郎、今、年、十、七、歳、其、疾、表、は、人、あり、
 て、小、七、郎、く、と、呼、ぶ、小、七、郎、誰、か、る、ろ、ん、と、表、は、お、れ、は、佐、人、を、お、け、り、方、
 發、の、侍、小、七、郎、は、向、ひ、来、い、お、軍、家、の、馬、下、荒、川、氏、部、と、い、者、は、お、軍、
 家、妻、屋、の、明、方、を、受、し、る、及、り、御、家、人、は、お、抱、ら、る、き、系、は、又、く、都、へ、の、
 け、り、御、目、尺、一、疋、と、て、系、物、指、と、せ、り、る、小、七、郎、は、又、お、殺、さ、し、系、年、

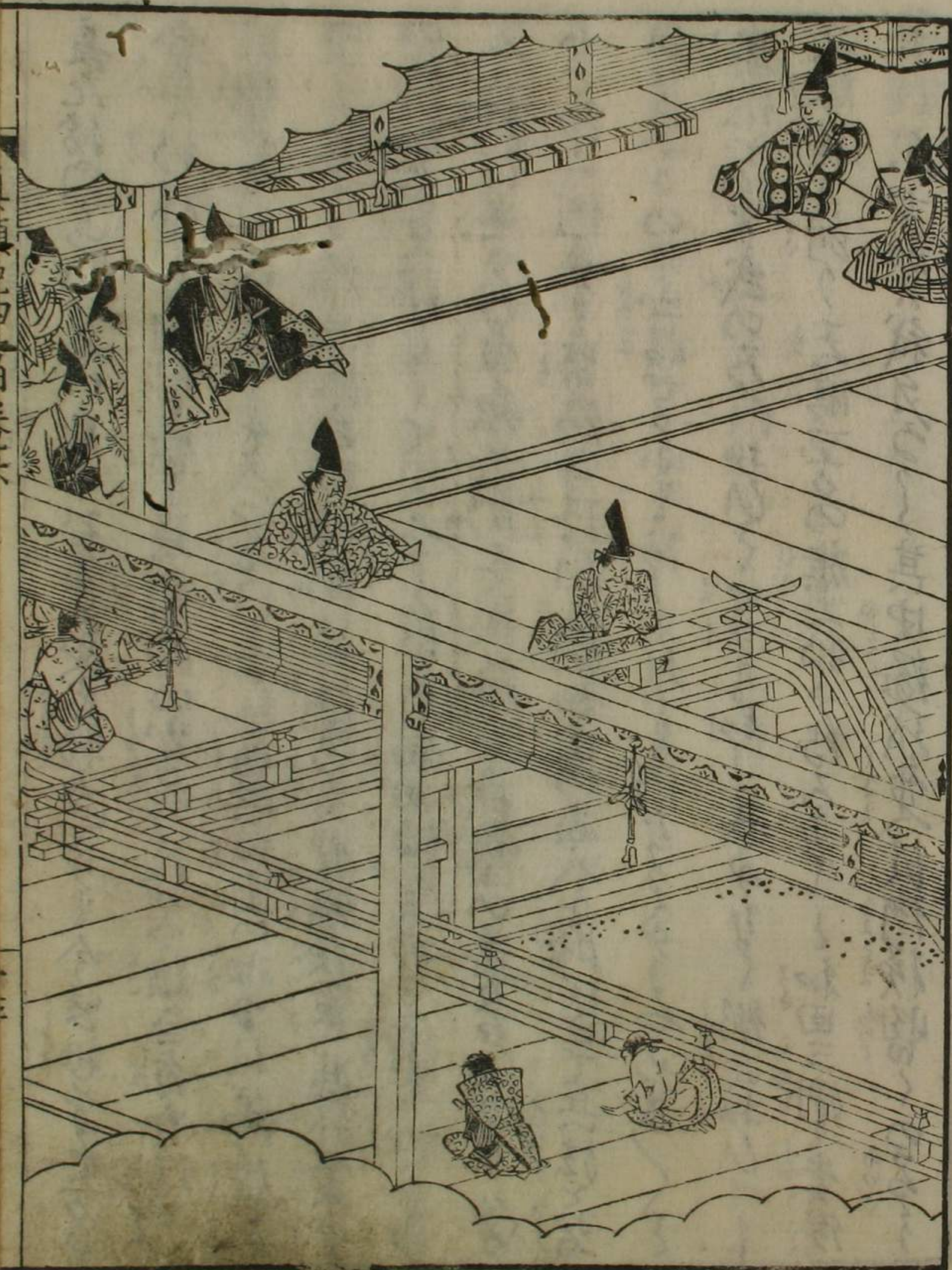


入江小七郎
安利家
よろ
めさ
る
園

貞显言四篇卷六

未だ身多痛ひてお軍家の御事小應じき者より人
遠く々と所々荒川民部をえり糸物小押入急の御事
退りて却て御事めを蒙りては疾く進むふぞ小七郎も
羞の心地して急用の思急も出さる内糸物を籠都をさしていそぎ
りりかぬ室町の御事列り始めて見らるお軍家の御被立国廣
間後定不白書院更書院若の御居間奥御殿玉の覺令の深若若
兵を圍被唐士の阿房官も是より去りて是へり其外番をくは
銃炮を銃殺十本の長柄を立並上下の侍殿をいそぎ諸士及
び奴僕小者より出入の人数を改め正室に御軍家の御被立とて
威義個ひて見ふ小七郎被民部は係と大廊下の下白砂を
て諸候大老の諾不と押さき次の間は遠より取をよてとの間と氣ひ

見ふ小其以の官銀三好修理がま義次岩成を稅女を前と御家人
上中務をま長岡兵部が彌三剛大和守和回伴がま末席より白發
更の銀袋若若れ銀袋とて押さる善い安し松永彈正久秀之其外仁本
石半吉良畠山の面列を正と相諾より小七郎其甚恐と只抵抗して
修成何の耐も若若重稅女を中より入の長兵衛が將小七郎とい
はがゆよ其一方も退り入の長兵衛門後お軍家の御被立危難の御被立
守と心を合せ忠勅の働さゆ而功を思召出され候にもる人きの不お後
軍より押さく逃くとおぬし長兵衛門も痛死に長兵衛は佐々木が
仕方の其小七郎才智明敏かるはお軍家の御被立は「刻今日石
出され御家人の列に加へ給る間も難く存候」とやされ小七郎
は只「何と何と何と何と仕なるべきやうも知れ其上我祖又



真言宗の神巻

長尾清門とて世者のあまの軍を忠勅にすも今彼ゆきて
 合兵の形跡も何にも思ひの外の出づるに難き有御法
 以根名をもはせしむるに門とてしる尚討戦國の初るに御旗本
 の士もも豫兵法武略御槍法城美時戦疾軍其外軍中
 の猛烈も覚悟なうていふくはとて和同保賀守三割大和さ
 んに御けきえし昼夜兵衛を御練く武藝の善者古くく
 小七郎の何れも皆信はし三割和同のあ人を師して兵法を習
 ひ多ふさのし出情せふも何れも何れも何れもやめきくと
 奥儀と悟り武のるに御ひくくも御ひくくも御ひくくも
 又堪能く御り天晴一方の旗大御はるしと和同三割も貴儀
 とし小七郎の我れもく其中御兵衛は御何れ御留くのる

武衛兵衛御りなく記懐せし我世に希なる考やあるも乃と
 父母の嘆のしを蒙り今まで忍人と思ひ居るをさうくはしと
 又軍中の身家御り表しとさ内よ大戦いのあれはしと名て諸人の
 目か御さん若くその心に御ひく御し小七郎が武衛御軍御上候
 ぬきとの御りつと長園兵部が補後きと取り六具馬槍をと送
 りと小七郎はかく御り使せぬと小七郎御で令取く御り御
 出く御り御軍御上候の向よ出御あれは三官御を始めし仁本石
 半を良一と上御長園右に彦一三割和同のあ人の御範をを
 て御側よ御りをを御り御入に門其日の出よは前々威の御り
 白銀と御り御御り御御り御御り御御り御御り御御り御御り
 三月月の花は御り御り御り御御り御御り御御り御御り御御り



了えこし
 久の龍門
 晴るる名を
 取らん國

東海道御成道



の方を尋ひ向月毛の馬又騰り長刀の俊者も拵せ静くし業出
 たる武者連一人出るの兵とて刀をさす三割大和守進み出て
 ちけ程より一報練せ武郷上進みえきとの御守より御守に
 練り殺を成しれよと知れし小七郎馬上又平伏してけ御守
 上
 更に果死退き軍を進め又退き城裏の御守軍の号令馬を
 向し指揮し形勢実し百万騎の師とつひつば板弓をえり馬
 弛出二三又驅る弓と矢打つひ引後て切て殺しあやま
 的
 の心中村通しつり又之を祈ひ喚ぶと村も再び里と村援
 たり川列座の面一統又村つりくとも雲を暫く鳴り止りり
 物物業御流みよとの命令に依り難刀を水車又池に
 八方をくひる愛万化の秘術を成し近き弛戻し其形勢の烈

一きり電光乃ぶくく三爰然いよ及び上下に並居る大小名
 思ひ感多きく鳴りそ希代の勇士うましくはくは練渡れ
 小七郎馬を牽り志の御軍目及はし御盡し其誠面目より
 余り平伏しれ御軍おし時中勢をまをなして下りし海今日
 の武郷其感称はく一方の陣おし令せしれは方おし七
 万
 みる石の地を御賜るる子く古郷に立ゆり又は信り
 成せしと御時服をを拜成し難く由に都を立出る其勢
 列をいほれ令級の先捷箱持槍持弓殺の石具修造道をも
 其室を立傘大なる毛二羽又おし依人多くを連て彼業賞
 長御の後
 晴ふ古郷へ向しと白昼ははるくそゆりり近隣の老若男女
 小七郎がゆりよと門を立出入倍に焼く後をうへ口を
 母りひ笑ふ

甚し小七郎修平と祇家の内へ入り小七郎只今兵隊りてひとと大言ふ
てはつれは長兵衛夫婦大に驚きこいふ小七郎が廣くこやと周章
をせられたるやしく其様と云はれは夜服に破り月代のひゆららの終る
肩に懸りて作らさ形勢なりは珍珍き仕家を出て既七日方くと
男の腹せども立不有て知れど今日は何方と居りたるぞとをさく
後よ男の死に小七郎也も強がばえんは素より將軍家の名よんく
都へ登り三割六和守和因修平守を師して軍學兵法射御抄を
武道の奥儀悉く傳授を得ては及七万石の男よとあり一方の軍
ね小舎せらるる只今教多の供人を百連又を日有技と云きのお命を
蒙りおのゆるいとぬらふたそこそと物置れと伝先文よ安かか
濃よ世俗のつる獄をのけては放放耳と云く鼻をうむとの入

流のどく何の流さき次第なりは長兵衛夫婦信天已武士の家に生
年も又十七歳程のおよ化されしと云ぬ程云長いさか懐心と程
ゆくゆの相親をいんじと嘆りたる小七郎始りて心つれ我身をこれ
を夜更時どとては裂裂と摺疵実麻敷をいふ熱身のまにそと
目もあてられぬ情なれば小七郎も信天百連伏せりいふふやうじ
やと戸の外へゆくといはれ何地へゆやと云うれば日勢急奥引馬のうげも
見えぬ筋筋のあらむとわきれて洞もつらうる長兵衛怒り心腹合致
我身は及ぶ情吹らぬ筋短く人を化らぬ夕教を知りて死めて是
も信天山の筋のあらむとけし上り人を信し情吹山を去りて古
たを狩りけ眼をを暗しと牙を嚙で怒りたる時よけ長兵衛怒
よ信天なるか登嶽を信非嶽けを命り合せ始終のるれ終り



つえ
ひの長き清
再ひふえと

真景言の権者

